

博物館にみる同化と異化の政治学 ヘンリー・ジェームズの『黄金の盃』

中 村 善 雄*

The Politics of Assimilation and Dissimilation in the Museum :
Henry James's *The Golden Bowl*

Yoshio NAKAMURA*

Key words : Assimilation, Dissimilation, Museum

1. アメリカにおける蒐集と文化的ヘゲモニーの移行

スティーブン・D・アラタ (Stephen D. Arata) によれば、ジェームズの執筆期間とアメリカにおける美術館の勃興はほとんど時期を同じくしている (201)。ジェームズの初期作にあたる『ロデリック・ハドソン』(Roderick Hudson, 1875) では、アメリカ青年ローランド・マレット (Rowland Mallet) が、継承した遺産をヨーロッパ芸術の実例たる芸術品の購入に当てることを望んだが、彼の計画は珠玉の芸術品の展示に適した美術館がアメリカに存在しないことを露呈した。1869年のボストン美術館、1870年のメトロポリタン美術館の相次ぐ建設はアメリカにおける本格的な美術館の勃興を物語るが、その展示品の実態はコレクションを満たすため、著名な美術品のレプリカに終始した。ボストン美術館の管財人 J・エリオット・カボット (J. Elliot Cabot) は1886年に、美術館でのレプリカの使用は芸術品を体験するための適切、かつ安価な手段であると述べている (Arata 203)。『アメリカ人』(The American, 1877) のアメリカ人大富豪クリストファー・ニューマン (Christopher Newman) は名画ではなく、ルーブル美術館で邂逅したノエミエ嬢 (Noémie Nioche) の名画の模写を高値で購入し満足するが、その様子はアメリカの美術館では芸術作品のレプリカが一般的であったことを示唆している。ジェームズ自身、1874年にボストンで開催されたモンペンシエ

原稿受付：平成16年5月20日

*長岡技術科学大学語学センター

第40回日本アメリカ文学全国大会にて口頭発表 (2001.10.13)

公爵 (The Duke of Montpensier) の珠玉のコレクションがアメリカ国民にとって、依然として「馴染みの薄い様式」であるという感想を『画家の眼』(*The Painter's Eye*, 79) のなかで洩らしている。しかし、ボストン美術館の管財人カボットの後任者マシュー・S・リチャード (Matthew S. Richard) は1902年に、全てのレプリカはボストン美術館の理想に反すると説き、「美術館の目的は社会に高水準の審美趣味を確立することだ」(Burt 121) と述べ、オリジナルの芸術作品蒐集を希求した。ナサニエル・バート (Nathaniel Burt) が『快樂と宮殿 アメリカの美術館の社会的歴史』(*Pleasures and Palaces: A Social History of the American Art Museum*) のなかで、1895年から1905年にわたる10年間を「漆喰から大理石」("from plaster to marble," 102) の時期と称したように、『黄金の盃』が出版された1904年を含む世紀末と20世紀初頭は、アメリカの美術館にとって真正の芸術品が展示される重大な転換期だったのである。

こうした真正の芸術作品蒐集を可能にしたのが、大蒐集家と同時に大富豪であった J・P・モーガン (J. P. Morgan) やアンドリュー・W・メロン (Andrew W. Mellon) らの登場である。アデライン・R・ティントナー (Adeline R. Tintner) の『ヘンリー・ジェームズの20世紀世界』(*The Twentieth-Century World of Henry James*) によると、『黄金の盃』のアメリカ人蒐集家アダム・ヴァーヴァー (Adam Verver) の創造には J・P・モーガンやイザベラ・ガードナー (Isabella Gardner) が寄与した (224)。US スティール社を創設し、モーガン財閥を形成した金融王 J・P・モーガンは、1904年11月21日に「ザ・ミュージアム」と称されるメトロポリタン美術館の第4代館長に就任し、以来その美術館は現代の博物館の最先端に躍り出し、ヨーロッパで彼が蒐集した膨大な芸術品はモーガン・コレクションとしてメトロポリタン美術館に寄贈された。ヴァーヴァー氏の生涯の目標も美術館の建設と、蒐集品のアメリカへの移転と美術品の寄贈であり、J・P・モーガンの生涯と重なり合う。ジェームズ作品のもう一人の大富豪にして、蒐集家であるクリストファー・ニューマンの芸術品購入が私的な蒐集を目的としたのに対し、ヴァーヴァー氏の生涯の目的は、「彼の生まれた州の人々に対する贈り物」¹⁾として計画された美術館の建設と、「最高の知識」(23: 145) を「渴望し、感謝している無数の人々を開く」(23: 145) といった公的な目的である。1870年代のニューマンと1900年代のアダム・ヴァーヴァーの二人の蒐集家の蒐集目的の相違は、アメリカの美術館における複製から真正な芸術品の展示への移行と、美術館建設と大富豪との関係の変遷を物語っているといえよう。

ニューマンを遥かに凌駕するヴァーヴァー氏の大規模な蒐集行為は彼の身体描写にも反映されている。家具のない空虚な空間のなかで、「二つの広い、カーテンのない窓からの眺め」(23:170)と称されるヴァーヴァー氏の眼差しの強調は、彼の視覚への没頭と芸術品への鑑識眼を物語っている。加えて、彼の大きくない目の眼差しは、「外へと向けられた眼差し」(23:170)である。内から外界へのヴァーヴァー氏の眼差しのベクトルは、この大富豪による蒐集の拡張、言い換えれば文化的拡張主義を連想させる。ヴァーヴァー氏は、アステカ帝国の首都メキシコの制圧者「コルテス」(23:141)に、また娘のマギー・ヴァーヴァー(Maggie Verver)と共に「一組の略奪者」(23:13)と形容され、彼の住居は「ペルシャ王ダリウスの戦利品で飾られたアレクサンダーの幕屋」(23:19)になぞられ、ヴァーヴァー氏の蒐集行為には帝国主義を基盤とする文化的篡奪のイメージが濃厚に反映されている。

一方、主要人物のなかで唯一のイギリス人であるアシンガム夫人(Fanny Assingham)の夫、ロバート・アシンガム大佐(Colonel Robert Assingham)の身体的特徴は、「異常なやせ方」(23:66)をし、「顔や腹部は気味の悪いほどへこんだ」(23:66)姿である。「都市の略奪に参加した」(23:83)将校であった退役軍人のアシンガム大佐は、「小さな木の砦や、小さなブリキの兵隊を使って玩具の兵隊で戦争ごっこをする別の退役将校」(23:64)と重ね合わされ、かつての彼の征服行為も過去の産物と化し、児童と同等に扱われている。ジョナサン・フリードマン(Jonathan Freedman)は、『黄金の盃』の執筆時期には、イギリスの文化的、政治的退行の予兆を詳説する書籍や記事が多く書かれた(478)と指摘しているが、イギリス帝国主義の軍事的基盤を担ったアシンガム大佐の「衰退する日々」("his declining years," 23:64)の様子は、イギリス自体の軍事的衰退と重なりあっている。同時に、ヴァーヴァー氏に代表されるアメリカの(文化的)拡張主義と好対照を成しているといえよう。こうしたイギリスの軍事的退行とアメリカの経済的、文化的進展はまた、大英博物館が本来なら所有できた蒐集(略奪)品が、「ミシシッピーを超えた」(24:147)ヴァーヴァー氏の博物館へ流出することに、大英博物館の学芸員クライトン氏(Mr. Crichton)が懸念する様子にも示されている。

『黄金の盃』は、芸術品を通じて、アメリカの美術館勃興とそのパトロンとなるアメリカ人大富豪の様相をなぞると同時に、イギリスからアメリカへの経済的、文化的ヘゲモニー移行の予兆を具現化しているのだ。

2. 人種をめぐる異種混交性と蒐集

イギリスからアメリカへの蒐集品を通じたヘゲモニー移行の予兆は、プリンス・アメリーゴ（Prince Amerigo）という登場人物を通じた人的移動という形式によっても敷衍されている。

彼〔アメリーゴ〕はテベレ河のほとりに残してきたローマの都よりも、古代国家の真の明確な像を、テムズ河のほとりに見出す現代ローマ人の一人だった。世界が貢物を捧げた古代都市ローマの伝説を聞いて育ちながらも、彼はそのような都市の面影を、現代のローマよりも、現代のロンドンに認めていた。（23：3）

語り手は「帝国」（*"Imperium,"* 3）の移動を、出身地ローマの「テベレ河のほとり」からロンドンの「テムズ河のほとり」への移動と表している。その「帝国」＝ヘゲモニーの移転に伴って、アメリーゴ自身もローマからロンドンへ移転し、彼自身が「帝国」の移行をなぞる痕跡として機能している。さらに「博物館物」（*"morceau de musée,"* 12）としてアメリーゴが巨万の富を有するアメリカ人ヴァーヴァー親子の「所有」となることは、ロンドンからアメリカへのヘゲモニーの変遷の予兆を裏書きしている。「博物館物」と化したアメリーゴはローマ ロンドン アメリカという経路を辿る巨視的にみた「帝国」の地政学的潮流を敷衍していよう。

アメリーゴはヴァーヴァー氏によって、「ここヨーロッパでしか得ることのできない蒐集品の一つ」（23：12）として遇される一方で、シャーロット・スタント（Charlotte Stant）を自らの「所有物」（23：46）として扱う。シャーロットはアメリーゴにとって、「彼自身の所有物」（23：46）であり、彼女の各々の身体的特徴は、「完全なリストに載せられ、その一つ一つがいわば長い間『保管』しておくために確認され、包装してナンバーをうち、洋ダンスにしまわれたようなもの」（23：46）と化している。『黄金の盃』にはモノの蒐集と同時に、諸々の人間関係に、このように蒐集する者と蒐集される者といった権力関係が根付いている。この二項対立の力学のなかで、アメリーゴはヴァーヴァー親子との関係において所有される立場だが、シャーロットとの関係においては所有する側に反転し、彼女を補完物にすることで、蒐集の権力関係のなかで均衡を保っている。

アメリーゴは蒐集行為の底流に流れる権力学を具現化しているが、一方でア

シンガム夫人は蒐集の論理の別の側面を具現している。夫人の身体的表象は次のように記されている。

おまけに中年肥りした体は、どう見ても南方の娘か、あるいは東方の人のように見えた。彼女には何となくハンモックやディヴァンのなかで育ち、シャーベットを口にし、奴隷にかしずかれてきた人のような面影があった。彼女の様子を見ていると、彼女がすることといえば、寝そべったままマンドリンをとりあげたり、可愛がっているガゼルといっしょに、砂糖漬けの果物を食べることにぐらいたく見えた。ところが彼女は、実際、食物を食べ飽きたユダヤの女でもなければ、怠け者のクレオールでもなかった。
(23:34)

彼女はニューヨーク出身のアングロサクソン系アメリカ人であるにもかかわらず、ユダヤ人やクレオールに喩えられる。夫人の人種を明確に特定する典型的な特徴は存在せず、見る人に「誤読」(23:34)を促すだけである。彼女の身体というトポスは、人種的に異種混交なものが邂逅、接触、混在する結節点といえる。また、ヴァーヴァー氏の至高の芸術作品の蒐集とは異なるが、アシンガム夫人はもうひとりの蒐集家といえる。夫人は「玩具やまがい物」(23:34)等の「ものに覆われ、取り囲まれている」(23:34)女性である。言い換えれば、自らの身体を土台に数々の人種の特徴を寄せ集め、その上に装飾で更なる蒐集を施して、パトリシア・マッキー (Patricia McKee) が指摘するように、夫人自らが一つの蒐集空間へと還元される(75)。その異種混交性は、アシンガム夫人自身の混交性の指標であると同時に、異なる者同士を接触させ、結びつける結節点としての夫人の役割を強調している。ロンドンでのシャーロット・スタントとアメリーゴの再会の場の提供、マギーとアメリーゴの最初の出会いの仲介、アダムとシャーロットの結びつけ、これらの接合は全てアシンガム夫人を媒介して実行されている。さらに、シャーロットとアメリーゴの再会是不倫へと展開し、マギーとアメリーゴの出会いとアダムとシャーロットの出会いとはともに結婚へと発展し、『黄金の盃』の中の登場人物たちの相関関係が成立する。その諸関係の全ての接合の起点がアシンガム夫人であり、彼女は異なる者同士に関係性を生み出し、ネットワークを構築する機能、言い換えれば異質なモノ同士を結合させる博物館の力学を踏襲している。

3. ユダヤ人の身体性とネットワークの結節点としてのユダヤ人

レオン・エデル (Leon Edel) は、「ジェームズの場合、民族的な風俗や特異性を風刺したり、民族的なステレオタイプを利用することはあるにせよ、彼の性質が偏狭だったり、人種の優越性を帯びることは全くなかった」(261)と述べている。『黄金の盃』には二人のユダヤ人が登場するが、彼らの役割もその民族的なステレオタイプを敷衍している。このユダヤ人たちは登場回数の少ない周縁的存在だが、本作品において重要な役割を担う。その一人はアダム・ヴァーヴァーにダマスカスのタイルを売る美術商グーターマン・スース (Guterman-Seuss) である。彼は齢30に満たない青年であるが、すでに11人の子持ちである。その子供達は皆、「褐色の澄んだ小さな顔をし、無表情な年寄りじみた鼻の上に、同じく無表情な年寄りじみた眼」(23:213)をし、同じ輪郭の特徴を有している。差異の記号としてのユダヤ人の鼻をもち、「褐色」("dark")の肌をした老若男女が全員グーターマン・スースに経済的に依存している。サンダー・L・ギルマン (Sander L. Gilman) は『ユダヤ人の身体』(*The Jew's Body*)の中で、「鼻はユダヤ人を見るにあたっての、差異の中心的場所の一つとなった」(180)と述べている。その鼻は、ユダヤの身体的可視性として認識され、固定された遺伝的記号として機能した。この可視的なユダヤ性を否定する目的で、世最初の現代的な鼻の美容整形手術が施されたのは象徴的である。ギルマンによると、近代美容整形の創始者ジャック・ヨーゼフ (Jacques Joseph) が1898年1月ユダヤ人青年に施した美容整形の部位は鼻であり(184)、いかにその部位がユダヤ性を表象する身体的差異として機能しているかを物語っている。

また、19世紀の人種科学のなかで、ユダヤ人の皮膚の色は問題の一つであった。ジークムント・フロイト (Sigmund Freud) は「間の子」のイメージを使い、「それは全体として見たなら白人に似ているものの、何らかの目立った特徴において黒人の血統を顕してしまい、それにより社会から排除されて、白人である特権を何も享受しない人々だ」(191)と述べている。ユダヤ人は黒人の痕跡を留めると考えられ、ユダヤ人と黒人との混血児のイメージは、人種的境界の越境を意味したのである。ギルマンも、「19世紀後半の民族学文献の一般的合意としては、ユダヤ人とは『黒人』か、あるいは少なくとも『浅黒い』とされていた」(239)と記している。

もうひとりのユダヤ人登場人物も骨董品の取り扱いを生業としている。グーターマン・スースと異なり、匿名であり、「異常なまでの眼差し」(23:104)以外に彼の身体的描写はない。そのユダヤ人の「異常なまで眼差し」の強調は

ヴァーヴァー氏の眼差しの強調と重ね合わせり、蒐集家としての確かな鑑識眼の表象となっている。しかし、それ以外の外的特徴が皆無であり得体の知れぬ人物として措定されている。また、ユダヤ人骨董商はアメリーゴとシャーロットのイタリア語での秘密の会話を理解し、多言語を駆使する人物として措定される。『使者たち』(*The Ambassadors*, 1903) の中でも、フランス語、イギリス語、イタリア語、ドイツ語といった多言語を自在に駆使するマルチリンガルなヴィオネ夫人は、「多言語を話す小さなユダヤ人女性」(230) と比較されている。

このグーターマン・スースと匿名の骨董商の二人のユダヤ人はともに、美術商として物質的移動を仲介する機能を果たしている。ポール・ギルロイ (Paul Gilroy) は『ブラック・アトランティック』(*The Black Atlantic : Modernity and Double Consciousness*) のなかで、ユダヤ人を起源とするディアスポラのアイデンティティを、「^{ルーツ}起源」("roots," 19) に向かう直線的なアイデンティティの関係性よりも「^{ルーツ}経路」("routes," 19) という移動のプロセス、移動によって生成された媒介的なものにアイデンティティを見出し、そのことで過去と未来をつなぎ、同時に複数の場所をつなぐネットワークとしてのアイデンティティと規定する。二人のユダヤ人は、ギルロイのディアスポラ・アイデンティティを文字通り具現化しており、過去の産物たる美術品を現在、未来の蒐集へとつなぐ媒介として、また物品を政治的、民族的境界を超越し、トランス・ナショナルに流通させる存在として、通時的、共時的に連係するネットワークとして機能する。また、ユダヤ人のマルチリンガルな言語能力は越境の分節点ともなりえる言語的障壁の無意味化に大いに寄与することとなる。

4 . 偽装される同化

アメリーゴという人間は次の二つの部分が構成要素となっている。一つは、「他の人々のさまざまな行いや、歴史や結婚や、罪や、馬鹿げたことや、果てしもない愚行」(23 : 9) を行なった彼の先祖たちの「歴史」(23 : 9) である。もう一つはアメリーゴ自身の、「疑いなくずっと小さなものであり、知られざる、そして重要ならざる個人の自我」(23 : 9) である。アメリーゴを構成するこうした歴史的特質と個人的特質のうち、ヴァーヴァー親子にとっては、前者のみが「^{モルソー・ド・ミューゼ}博物館物」として重視され、彼の個人的特質は問題にされない。ヴァーヴァー親子はアメリーゴを他の蒐集品同様に同化させようとし、彼の個人的部分を無視し、パトリシア・マッキー (Patricia McKee) の言葉を借用すれば、公爵に「去勢」(89) を迫る。しかし、ジェームズは『アメリカの風景』(*The American*

Scene, 1907)において、アメリカの同化過程に晒されるイタリア人移民に対し、「幾世代にもわたって育てられた特質が完全に消滅するなどということが考えられるだろうかという疑問」(463)を呈している。この問いは同じイタリア人であるアメリーゴがヴァーヴァー氏による同化作用を全面的に受容するのかという問題とも通底するだろう。

ジェイムズ・クリフォード (James Clifford) は、『ルーツ 20世紀後半の旅と翻訳』(*Routes : Travel and Translation in the Late Twentieth Century*)のなかで、博物館の同化作用について、次のように述べている。

想像の共同体を維持する過程において、博物館は「他者」と向きあい、「真正でない」ものを排除する。これが現代の文化政治の特性であり、それは創造的であると共に破壊的な、植民地化／脱植民地化、国民統合／マイノリティの主張、資本主義的市場の拡大／消費者の戦略といったそれぞれ重なりあっている歴史的文脈の中で規定されているものなのである。(250)

博物館という静的空間の底流には、相反するベクトルがせめぎ合い、ダイナミズムを生み出す様々な位相の権力的磁場が存在している。つまり、ヘゲモニックな国家は被植民地の文化資産の破壊と強奪、自国への移送・陳列を行う。一方で、こうして創造された1つの蒐集空間の背後には、蒐集に相反するベクトル、すなわち各地域からの蒐集品がその蒐集品の背景となる独自性や歴史性を主張し、博物館の統合作用を脱しようとする力学が働く。ヴァーヴァー氏が蒐集する「博物館物^{モルソー・ド・ミュゼ}」と化したアメリーゴにも同様の相反する力学が作用し、彼はヴァーヴァー氏による同化を甘受する一方で、一種の「破壊的」な「脱植民地化」を企てる。アメリーゴはヴァーヴァー氏の妻であるシャーロットとの姦通によって、彼を歴史的に形作った先祖の「愚行、罪業、略奪、浪費」(23: 9-10)の踏襲と彼に要求された「去勢」を拒絶し、彼を構成する個人的特質を具現化するのだ。姦通は「博物館物^{モルソー・ド・ミュゼ}」として、アメリカへの同化を迫るヴァーヴァー氏への暗黙の抵抗であると同時に、アメリーゴの祖先との重なりを意味する。そしてこのアメリカへの同化、また蒐集品としての同化と、姦通を通じたヴァーヴァー親子への抵抗は本作の題名でもある亀裂の入った「黄金の盃」によって表象されよう。つまり、黄金の盃の滑らかな表層は、ヴァーヴァー氏の「コレクションの一つ」(23: 12)として、また異質な者が有する凹凸を抹消する同化作用をアメリーゴが甘受する姿勢を物語る。一方、表層に隠蔽された

裂け目はシャーロットとの姦通によって生じるマギー・ヴァーヴァーとの夫婦関係の裂け目、またアメリカへの同化や「博物館物」^{モルソー・ド・ミュゼ}に対するアメリーゴの抵抗の象徴としての意味を持ち合わせる。

アメリーゴという名前自体もアメリカへの同化と、その同化への擬態の両義性を物語っている。「新大陸の名付け親」(23:78)であるアメリーゴ・ヴェスプッチ (Amerigo Vespucci) はドイツの地図製作者マルティン・ヴァルトゼーミュラー (Martin Waldseemüller) によって、1507年にフランスで出版したラテン語の書『宇宙誌入門』(*Cosmographiae Introductio*) のなかでアメリカ大陸の第一発見者として紹介され、アメリーゴの名はまさにアメリカの象徴と化している。しかし、その命名は周知のごとく、「コロンブスより一年早くアメリカ本土に到着した」というヴェスプッチの虚偽の書簡に基づくものであり、アメリーゴ・ヴェスプッチは「アメリカの偽の発見者」(23:79)である。同じイタリア出身のアメリーゴ(公爵)も、アメリーゴの名を継承することで、アメリカ人としての同化を受容する姿勢をみせる一方で、アメリカに対する背信的行為を潜在的に内包していることは想像に難くない。

5. アメリーゴのユダヤ性

アメリーゴの、いわば亀裂としての役割は、周縁的存在であるユダヤ人骨董商にも通じる。アメリーゴの弟の妻はユダヤ人であり、彼はユダヤ人と姻戚関係にあり、彼らの潜在的結びつきが暗示されている。また前述したように、アメリーゴはシャーロットとの不倫を通じてマギーとの夫婦関係に亀裂を生ぜしめ、「博物館物」^{モルソー・ド・ミュゼ}としてアメリカの同化作用を受ける状況に対して、アダム・ヴァーヴァーの意に反して、自らが亀裂のある「蒐集品」であることを潜在的に主張する。一方、ユダヤ人骨董商もマギーにひびのある黄金の盃を売りつけることで、亀裂をもたらす媒介として機能する。マギー・ヴァーヴァーが黄金の盃の裂け目を看破できなかったのに対し、アメリーゴが瞬時に見抜いたことは、表層に隠蔽された亀裂の存在を知る者として、アメリーゴと盃を売る匿名のユダヤ人骨董商の共通性を浮び上がらせる。

アメリーゴとユダヤ人店主との共通性は、身体表象にみる共通性にも反映されている。アメリーゴは、「イギリス人の眼にはひどく『外国人』らしくはなくて、『洗練された』アイルランド人のようだ」(23:4)と表される。リチャード・ダイアー (Richard Dyer) は『白』(*White*)のなかで、アイルランド人やユダヤ人は白と黒の境界に位置し、歴史的に時に迫害され、時に白のカテゴリー

に収斂され、また緩衝材として機能した(19)と述べている。つまりこの二つの人種は、白のカテゴリーに完全に組み込まれもせず、時に疎外される周縁的存在であり、同時に白と黒の間を繋ぐ結節点でもあり、緩衝装置でもある。そのポジショナリティは白と黒のいずれの集団にも固定的に帰属せず、白と黒の二項対立の境界を往来、越境するトランス装置として機能し、その運動性は境界の攪乱や流動化を惹起する戦略的機能を有するのだ。

アメリーゴは「アイルランド人」と形容されると同時に、彼の身体は「ダーク」(23:4)によって表象されている。これは前述したように、19世紀の人種科学をめぐる言説のなかで、白と黒の間の異種混交的存在としてのユダヤ人の「ダーク」と重なりあう。ユダヤ人とアメリーゴの「ダーク」という身体的表象は、彼らの共犯関係を視覚的に浮かび上がらせることになる。

その黒に近似した「ダーク」な存在が、ヴァーヴァー親子に代表される白との接近・邂逅を果たしたとき、それは異種なるもの同士の邂逅となる。その白と黒との接触をエドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)の「ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語」("The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket")のゴードン・ピム(Gordon Pym)に自らを重ね合わせて、アメリーゴはその邂逅を物語る。

それは難破したゴードン・ピムの物語であって、彼は小さなボートに乗って、北極、それとも南極だったろうかの方へ、いまだかつて何人も行ったことがないほど遠くまで流されていった。そしてある時、彼は目の前に濃厚な白い大気が、目も眩む光のカーテンのようにかかっているのを見た。このカーテンは闇がものを隠すように、いっさいのものを隠すのだが、それでいて牛乳か雪のような色をしていた。公爵は自分の乗った船が、このような神秘の上を漂っているような感じがする時があった。アシンガム夫人を含めて、彼の新しい友人達の心の状態は、大きな白いカーテンに似ていた。彼はカーテンといえば、黒ずんだ紫のカーテンしか知らなかった。そのカーテンがかかっているところには意図された不吉な闇("darkness")が生じるのだった。(23:22-23)

ヴァーヴァー親子やアメリカ人の執拗な白の表象はアメリーゴを取り囲み、その白の表象は様々な位相で彼を包囲する。ダイアーによると、19世紀アメリカ人としてのアイデンティティを確立する過程で、白への帰属がヨーロッパの

移民者達に求められた。白は、ネイティブ・アメリカンや輸入黒人に対する優越と、彼らに対する反感の指標として用いられたのである。また、ヨーロッパ移民者達の背景的多様性、つまり出身国の文化的、歴史的背景の相違を覆う「カーテン」として白は用いられた。白は雑多な異種の人々の包括、統一に大いに有効だったのである（Dyer 19）。こうした重層的な意味を包含する白のカーテンは異質な者を包み込み、アメリカ化を推進する同化作用の指標である。他方アメリーゴを馴染み深く取り囲んでいた「黒ずんだ紫のカーテン」は彼のアイルランド性とともに、白への同化に回収され得ない抵抗の証左といえよう。

6．亀裂の表出

アメリーゴとユダヤ人骨董品商は既述したように、共に黄金の盃の亀裂を知り、なおかつその亀裂の表出を惹起する役目を果たす。ユダヤ人店主はマギーに対して、「実際の価値以上の値段を要求した」（24：197）ことを後悔し、損を覚悟で、マギーに黄金の盃の購入代金を返還しに来るが、これは狡猾で巧みな商才を発揮するステレオタイプとしてのユダヤ人の例外的行為といえる。語り手は、「黄金の盃の売主を動かした良心の咎めはどんな種類の売主にも稀なものだが、倏約家であるイスラエルの子どもにあってはほとんど前例がない」（24：222 - 23）との感想を洩らすほどである。また、『アメリカの風景』のなかで、「ユダヤ人自身の財布の紐を緩めさせようと、こんなにきらびやかで、おおっぴらに餌付けした罠をしかけてよいものか...ユダヤ人が巧みな商才を発揮するのは概してユダヤ人以外が相手の時だ」（468）と述べている。これらは、ジェイムズが利用してきたステレオタイプとしてのユダヤ人像の強調といえよう。しかし、ジェイムズはユダヤ人骨董商にそのステレオタイプな役割を逸脱させることで、ユダヤ人店主が潜在的に担っていた亀裂としての機能を結果的に顕在化させる役目を果たすことを可能にする。アメリーゴとシャーロットの特別な関係が盃の代金を返還しに来たユダヤ人店主によって、マギーに暴露されるからだ。それはマギーに対し隠蔽されていた亀裂の表出・露呈といえる。アメリーゴとシャーロットの隠匿すべき不倫関係の第一発見者として、当初からその関係暴露を孕む潜在的脅威であったユダヤ人店主は、自らに課されたステレオタイプな役割から一時的逸脱を図ることによって、マギーとアメリーゴの関係に内在する亀裂の表出を顕在化させる役目を全うすることとなる。また、ヴァーヴァー親子が所有する一流の芸術作品群のなかに、黄金の盃の亀裂が発見されることで、その盃は真正な蒐集群全体に対する同一化の抵抗・攪乱のシンボ

ルとして機能する。

黄金の盃の亀裂はアメリーゴを覆っていた「黒のカーテン」と結びつき、マギーを覆う「白のカーテン」に対して、「黒みを増す影」("the darkening shadow") (24: 6) として接近・接触し、彼女を包囲していく。トニ・モリソン (Toni Morrison) は『白さと想像力 アメリカ文学の黒人像』(*Playing in the Dark : Whiteness and the Literary Imagination*) のなかで、19世紀の白人アメリカ人にとって、白に表象される自らの新しさ、潔白を想像するにはアフリカ人やゴシックが生み出す黒の想像が必要であった (37 - 38) と述べている。白が白であるためには、黒の存在が必要不可欠であり、マギーは自らの周囲に黒の存在を感じたとき、初めて黒の存在と同時に、自らの白としての存在を知ったといえる。

白の表象たるマギーが黒 (ダーク) の存在としてのアメリーゴを知ったとき、彼女はその黒との和解を図る。つまりマギーは、アメリーゴとの関係を修復して、「本来そうあるべきだった黄金の盃」(24: 216)、つまり「ひびのない盃」(24: 217) を作ろうとする。アメリーゴとシャーロットの姦通という亀裂をできる限り隠蔽したままで、マギー自身が関係修復を図る。この修復はアメリーゴとの共同作業であり、白と黒の二項対立の接触・接合であるともいえよう。この修復作業が成功したとき、シャーロットとアメリーゴは、周囲の装飾品と調和した芸術品として同一視されている。ヴァーヴァー氏は「勘定があっている。よいものが手に入ったね」(24: 360) と感想を洩らす。それはシャーロットやアメリーゴの修復が終了し、彼らが亀裂のない「博物館物」になり、ヴァーヴァー親子の蒐集対象として同化が完了したことを物語っている。

しかしシャーロットが「私が求めるのははっきりとした裂け目 ("break") です」(24: 315) というように、その関係修復のひびのない盃を生み出す必要条件として選択された結果は、アダムとマギーのヴァーヴァー親子の亀裂である。具体的にはアダム夫妻のアメリカへの帰国とアダム夫妻と公爵夫妻の別離である。それはアメリーゴとマギーとの裂け目の修復を完了する一方で、ヴァーヴァー親子の間に亀裂を惹起し、その裂け目はアメリカとイギリスという地理的距離にまで拡大・増幅する。マギーとアメリーゴの亀裂の修復は結局、新たな分節化を生み出す結果を招き、いわば、同化と亀裂という相反する^{せめ}闘いは完全解消されず、一時的妥協でもって結末を迎える。アシンガム夫人が三つに叩き割った黄金の盃のうち、マギーが「一度には二つの断片しか運べなかった」(182) ことは、ひとつの亀裂の修復には別の亀裂が不可欠であり、アメリーゴとマギーの亀裂の修復の代償として、ヴァーヴァー親子の別離が必要であるこ

とを黄金の盃の断片が予定調和的に物語っているのだ。

7. 結び

『黄金の盃』は、蒐集行為にみる力学を表している。アメリーゴは出身地ローマからロンドンへと移転し、そしてアメリカ人親子の「所有」となった。ルーツ ("roots") を喪失し、ヘゲモニックな潮流を辿るアメリーゴの移動性・流動性は、ユダヤ人のディアスポラ・アイデンティティと重なりあっている。クリフォードによると、ディアスポラ・アイデンティティとは「一方で国民国家／同化主義的イデオロギーと構成的な緊張関係にある。それは同時に、土着的 ("indigenous")、とりわけ自生的 ("autochthonous") 主張とも緊張関係をもつ」(252) という両義性に根ざしている。グーターマン・スースや匿名のユダヤ人店主は一方でヴァーヴァー氏の蒐集を容易にし、自らの移動性・流動性をもって、物と物、国と国を連結させる結節点としての役割を果たす。他方で、ユダヤ人骨董商が所有していた亀裂のある黄金の盃に表象されるように、同化論理の隙間を摺り抜け、その論理に回収できない残余物として、つねにアメリカの周縁を巡る潜在的脅威として機能する。偽のアメリカ発見者アメリーゴ・ヴェスプッチの名の継承者であり、白 (人) に対する周縁的位置を占める「アイルランド人」に例えられ、黒 (「ダーク」) の存在であるアメリーゴも、ヴァーヴァー氏やアメリカの白への同化に服従する姿勢を見せる一方で、ヴァーヴァー氏の妻であるシャーロットとの姦通によって、批判的なオルタナティヴとして同化への攪乱装置として作用する。

これらを統合すると、ユダヤ人とアメリーゴは、共同体の最小単位であるマギーとの夫婦関係から、国家的プロジェクトに匹敵するアメリカ大富豪の蒐集行為、また異種なる者を回収するアメリカの同化政策に至るまで、彼らを取り巻くこれらの重層的な統合作用に対して縦断的に貫通するひびとして機能するのである。一方、ヴァーヴァー親子は同化を促進し、亀裂の表出の予防・修復をする装置として機能するのだ。滑らかな表層下に亀裂が内在する黄金の盃はこの二つの相反する力学を表象するもののだといえよう。

註

- 1) Henry James, *The Golden Bowl, The Novels and Tales of Henry James*. Vol.23 (New York: Augustus M. Kelly, 1971): 145. 以後、この書からの引用は引用末尾の括弧内に巻数と頁数を記すものとする。
また、Henry James, *The Golden Bowl, The Novels and Tales of Henry James*. Vol.24 (New York:

Augustus M. Kelly, 1971)からの引用についても,引用末尾の括弧内に巻数と頁数を記すものとする。
なお,日本語訳については,工藤好美訳,『黄金の盃』(東京:国書刊行会,1983)を参考にした。

引用文献

- Arata, Stephen D. "Object Lessons : Reading the Museum in *The Golden Bowl*." *Famous Last Words : Changes in Gender and Narrative Closure*. Ed. Alison Booth. Charlottesville : UP of Virginia, 1993.
- Burt, Nathaniel. *Pleasures and Palaces : A Social History of the American Art Museum*. Boston : Little, Brown, 1977.
- Clifford, James. *Routes : Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge : Harvard UP, 1997.
- Dyer, Richard. *White*. London : Routledge, 1997.
- Edel, Leon. *Henry James: The Treacherous Years 1895-1901*. London : Rupert Hart-Davis, 1969.
- Freedman, Jonathan. "The Poetics of Cultural Decline : Degeneracy, Assimilation, and the Jew in James's *The Golden Bowl*." *American Literary History* 7.3 (1995) : 477-99.
- Freud, Sigmund. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. Ed. James Strachey et al. Vol.14. London : Vintage, 2001.
- Gilman, Sander. *The Jew's Body*. New York : Routledge, 1991.
- Gilroy, Paul. *The Black Atlantic : Modernity and Double Consciousness*. Cambridge : Harvard UP, 1993.
- James, Henry. *The Ambassadors. The New York Editions of Henry James*. Vol.21. New York : Augustus M. Kelly, 1971.
- . *The American. The Novels and Tales of Henry James*. Vol.2. New York : Augustus M. Kelly, 1976.
- . *The American Scene. Collected Travel Writings : Great Britain and America*. New York : Library of America, 1993.
- . *The Golden Bowl. The Novels and Tales of Henry James*. Vol.23. New York : Augustus M. Kelly, 1971.
- 〔邦訳:工藤好美訳.『黄金の盃』東京:国書刊行会,1983.〕
- . *The Golden Bowl. The Novels and Tales of Henry James*. Vol.24. New York : Augustus M. Kelly, 1971.
- . *The Painter's Eye: Notes and Essays on the Pictorial Art*. Ed. John L.Sweeney. London : Rupert Hart-Davis, 1956.
- . *Roderick Hudson. The Novels and Tales of Henry James*. Vol.1. New York: Augustus M. Kelly, 1971.
- McKee, Patricia. *Producing American Races*. Durham: Duke UP, 1999.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark : Whiteness and the Literary Imagination*. Cambridge: Harvard UP, 1992.
- Tintner, Adeline R. *The Twentieth-Century World of Henry James*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2000.